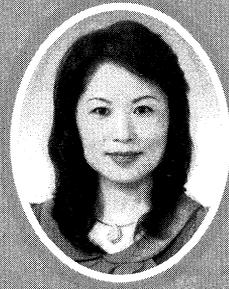


オアシス



木の洞の話

— グリム童話を考える ⑥ —

大野 寿子

ドリス・ラウデルトの『神話樹』¹には、二九種類の樹木の植物学的見識のみならず、それらにまつわる神話や民間信仰や言い伝えが、美しい挿絵や写真と共にドイツ語で綴られている。

その中の「オーク」Eiche²の章の扉には、洞のあるオークの古木の神秘的な写真が掲載されている。時間の流れを封じ込めたかのような風格漂う巨大な幹からは、大枝が左右に長く伸びており、「おいで、おいで」と手招きするしなやかな腕のようである。びっしりと地面に張られた苔生す根は、太い幹を十分支えうるどっしりとした力強さを見せながらも、実は地面を少しずつつ移動しているのではないかと思わせるほど、不気味で繊細な曲線を描いている。³

とはいえ、この古木のいわば腹の部分にぽっかりと空いた洞がいったいどのくらい大ききなのか、本の写真を見ただけでは見当もつかない。木が大きければ大きいほど、洞も大きい

だろうという想像はつく。しかし、写真の技術が古木を巨大に思わせているだけで、案外小さな木なのかもしれない。この洞には人が入れるのか。それとも小さな穴なのか。そもそもこの木はどこにあるのか。博士論文の執筆中、頭の中が健やかなるときも病めるときも脳裏に焼きついて離れなかったのが、このオークの古木の姿であり、その洞の大きさに関する終わりの見えない推察であった。二〇〇三年、四年頃の話である。

* * *

グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(以下、『グリム童話』あるいはKHMと略記⁴)で、森の中をさまようこととなる主人公は、ときとして、古木の洞の中を一夜の宿りとする。たとえば、KHMII「小さな兄妹」(Brüderchen und Schwesterchen)では、継母(実は魔女)の仕打ちに耐えかね家を出た小さな兄妹が、夕暮れどきに大きな森へと分け入る。悲しみ

疲れた空腹の二人は、「木の洞」に入つてぐっすり眠るのである。また、KHM3「マリアの子」(Marienkind)では、乙女マリアにより天上世界(天国)に引きとられた木こりの娘が、マリアの言いつけを守らず嘘をついたため、地上の寂しげな森へと落とされ声を失う。娘は森の中で、幹ががらんだうになつた一本の大木を発見し、その中で眠るのである。その後も彼女は、風が吹いたり雨が降ったりすると、その洞へと逃げ込んだという。このように、メルヒエンにおける古木の洞は、ふかふかの苔と同様に、ぬくもりのある寢床を提供するのみならず、避難所としても機能するのである。

さらに、KHM123「森の中のおばあさん」(Die Alte im Wald)では、幹部分に扉のついた木が三本登場する。その扉の一つを、白いハトからもらった鍵で開くと、その中には「ミルクの入った小さな皿」と「白パン」が用意されている。二つ目の木の幹の扉を開けると「きれいでやわらかいベッド」が、三番目の木の中には「金や宝石を縫いつけた服」が用意されているのである。木々の洞に扉がついており鍵まで掛かっているという描写は、ただ穴が空いているだけの木の洞よりも近代的で、木の家のようなイメージへと近づいているようにも思われる。

「小枝の二股の間から赤ちゃんが生まれる」とも考えるゲルマンの古い民間信仰においては、樹木そのものが、生命の源であると同時に、死者の魂が帰す場所とも見なされる。そのような樹木の洞に入るといふ行為は、避難(所)としての機能のみならず、

母体回帰のような意味合いをも帯びてくるのではないだろうか。また、古ゲルマンの樹木信仰に鑑みれば、洞のどの古木は聖なる木であり、その聖なる木の向こう側あるいは内部には、神性、神々の世界などが想起されるといふ。古木の洞から生命がやってくる。そしてそこへと生命が戻りゆく。民俗学的解釈を好む私のような人間はどうも、古木の洞は、あの世(あるいは「異界」)への入り口と考えてしまいたくなるのである。さらに、人生の節目において儀礼的な死と再生を繰り返すという通過儀礼の観念をここに強引に重ね合わせれば、木の洞に入るだけでなく、そこから出てくることも重要となる。それは、古い自分を葬り去り、新しい自分として再生することの意味なのだ。すなわち、メルヒエンの主人公たちにとつて、森の木の洞に一晩休むという、とるにたらないように見える行為さえもが、母胎回帰、神々の世界あるいは異界への侵入のみならず、新しい自分へと生まれ変わるかけがえのない第一歩にもなりうるのである。

* * *

二〇〇六年夏、グリム研究で著名な小澤俊夫先生主催「むかしばなし大学」の「グリムの旅」のアシスタントとして、ドイツと東欧を約二週間かけて巡ったことがあった。その二日目に、KHM50「どら姫」(Dornröschen)ゆかりの城(といつても観光用の後づけなのだが)「ザバブルク」を訪れた。今となっては廢墟となつたこの古城のふもとには、「ザバブルク原生林」と

いう大きな森が広がっている。その森の中に参加者全員で入ってゆきコーラスの練習をするというのが、この旅の慣わしとなっていた。アシスタントの私は一行の一番後につき、原生林へと分け入った。森は鬱蒼とはしていたが、木々の間に無造作に横たわる倒木には苔が生し、そこから華奢な新芽が芽吹いたりもしており、不気味な中にも生命の息吹きが感じられた。連なる幹の間からは遠くの風景が見え隠れし、昔好きだったルネ・マグリットの「白紙委任(状)」のあのミステリアスな絵のように、いつしか空間が倒錯しているかのようにも感じられ始め、その倒錯の世界が心地よくすら思えてきたのである。

ふと前方を見ると、洞のある古木がこちらを見据えて立っていた。旅行のメンバーたちが、一人、また二人の洞の中へと消えてゆく。そして再び顔をのぞかせ、「すごい」「おおきい」と歓声をあげているのである。その木こそ、あの『神話樹』で魅せられたオークの古木だったのだ。突然の出会いだった。あの洞は、大人の人間が三、四人入れるほど大きかったのだ。夢ではないかと疑いながら、メンバーが洞に入ったり写真を撮ったりしているのを遠くから眺めつつ、それが現実であること懸念に理解しようとしていた。しかしながら、背筋がぞつとするほど強烈な出来事を目の当たりにし、少しずつ景色がぼやけ、だんだん声が遠のいていった。

* * *

このとき脳裏をよぎったのは、子どもの頃の記憶だった。小

学校高学年の頃、太宰府天満宮(福岡)のほぼ隣に住んでいる友人の家に遊びにいったときの情景だ。彼女の弟と彼女と私の三人で、天満宮の池のエビを釣ったり、境内で鬼ごっこをしていると、突然夕立ちがやってきた。三人は、境内にそびえる樹齢千年を超えるクスの大樹の、大きな洞の中へと逃げ込んだ。まるでトンネルのような空洞だった。自転車二台と子ども三人がらくらく入るほど大きい。雷鳴と雨音をはるか遠くに感じつつ、洞の内部に棲みついた蟻の行列を見つめながら、私たちはアヤトリをしていたのだった。こんな些細な雨宿り体験が、なぜかしらドイツの地で鮮明に蘇ってきたのである。あのとき、内部から見上げたクスの古木は、とても不気味で神秘的だった。幹の内部に刻みつけられた、皺とも襞ともつかぬ立体的な縦じまが、巨木の内部を果てしない上方へと導いているように思われた。地面と木の残骸と根っこが入り混じったような、いびつな形状の足元は、きつとどこかに地底国へと通じる秘密の穴でも空いていそうな雰囲気だった。ここって『ドラえもん』の秘密道具の「アパートごっここの木」の中みたいだねといった記憶がある。木の切り株が巨大な空洞となり、その内部に入ると、地下茎がそのまま部屋になっているというあの話のことである。雨粒など一滴も落ちてこない。それほどの巨木の内部で感じた不思議な安堵感が蘇ってきたのである。

だからといって、ザバブルクのオークが太宰府のクスの木に見えたというわけではない。かつて、九大時代の恩師池田紘一

先生は、授業後、我々大学院生とよく梯子した屋台のカウンターで、「ゲートと博多ラーメンとを繋げてみよう」とおっしゃった。最初は冗談だと思ったが、そうではなかった。これらが繋がるはずがないなどという先入観こそ、学問には無用であるということ論されたのだった。ただし、この二つを繋げることは容易ではなく、そのためには研究書を十数冊以上書かなくてはならないかもしれない。それだけの覚悟と根気が研究者には必要だともおっしゃったのだ。私はこのとき、学問を志すならば両者をいつか繋げてみたいと思った。

こんなことをもあれこれ思い出しながら、二〇〇六年夏のドイツの森の中で、ドイツの「ザバブルク」と日本の「太宰府」が、『神話樹』の「洞のあるオーク」の写真の記憶と『グリム童話』研究の一部を介して、少々強引ではあるが一瞬繋がったような気がした。しかし、ドイツの文豪ゲートと博多ラーメンとを繋げるには、「いばら姫」さながらあと「百年」ほどかかってしまうかもしれない。やはり覚悟と根気が必要なようだ。考える、記憶する、忘れる、何かをきっかけにそれを思い出す、ここでもう一度考える……目標達成には、この果てしない繰り返しを要するのであろう。

* * *

結局、この神話的なオークの洞には入らなかつた。もし入っていたら、子どもの頃感じた木の内部の神秘的な安堵感を思い出し、二度と出たくないと感じたかもしれない。麗しい異界へ

と入ってしまったえば、世知辛い現実世界になど戻りたくないものである。そういえば、昔旅行で訪れた関西の有名な寺には、潜り抜ければ無病息災という柱があった。奈良の東大寺だったのだろうか。私は抜けられなくなつて、無理やり母に引つ張り出してもらつた記憶がある。だから、木から出られなくなるというトラウマがあつたとはいわれないが、ずっと頭から離れなかつたオークの巨木の洞の大きさを実体験するという千載一遇のチャンスをも、自ら封印してしまつたのは確かである。突然の出会いがあまりにも衝撃的すぎたのだ。たつた一本の木の洞の記憶がさまざまに記憶と結びつき、さらにそれがまた他の記憶と結びつき……。この記憶と思考の連鎖を整理するのにあときは精一杯だつたのだと今は思う。

ただ、負け惜しみではないが、楽しみは後に残したともいえる。いつかザバブルクのあのオークに再会し、できれば一人でひっそりと洞に入り木に話しかけてみるその日まで、私のグリム研究が根気よく続いていることを願う。

【追記】本稿は、郁文堂発行の機関誌「Brunnen」第四五二号（二〇〇八年八月）に掲載された拙文「木の洞の話―ザバブルクの「樫」と太宰府の「楠」―」（三―六頁）に加筆を施し新たに作成したものである（Brunnenとはドイツ語で「泉」「噴水」「井戸」等を意味する）。

【注】

(1) Doris Laudert: Myrthos Baum. Was Bäume uns Menschen bedeuten. Geschichte, Brauchtum, 30 Baumporträts. München 1999.

(2) Eiche (英語では oak) は、日本語のナラ (落葉樹種群) とカシ (常緑樹種群) のいわば総称と捉えられるべき語であるが、ヨーロッパ (特に南欧以外) では落葉樹ナラを指す。日本の翻訳史上ではカシと訳された経緯もあり、混乱を避けるためここでは「オーク」と記す。

(3) 『ブラザーズ・グリム』(Brothers Grimm) は、二〇〇五年に英国で作成された映画であり (テリー・ギリアム監督)、日本公開は同年十一月三日。映画の魔法の森に密集する、怪しげな「歩く木」を観たとき思い浮かべたのがまさに、この写真のオークの姿であった。

(4) グリム兄弟 (ヤコブ・グリムとヴィルヘルム・グリム) が一八一二年に収集刊行したメルヒェン集であり、KHM はドイツ語原題 “Kinder-und Hausmärchen” の略称である。一八五七年刊行の第七版決定版まで、グリム兄弟生前に七回版を重ねている。決定版での総話数は、「メルヒェン」二百一話 (通し番号は二百番まで) と「子どものための聖人伝」十話を合わせた計二百一十一話である。ここでは第七版テキストを使用した。

(5) 拙著『黒い森のグリム—ドイツ的なフォークロア』(郁文

堂、二〇〇八年) の第 I 部第五章「メルヒェンの森と通過儀礼」を参照のこと。

(6) シュール・レアリズムの画家ルネ・マグリットが一九六五年に描いたもので (原題は “Le blanc-seing”), 森の木立の見え隠れする乗馬する女性が、空間的にあり得ない配置で描かれている超空間的な騙し絵。

(7) 藤子・F・不二雄『ドラえもん』第十巻 (てんとう虫コミックス) に収録。

— おおの ひさこ・文学部准教授 —